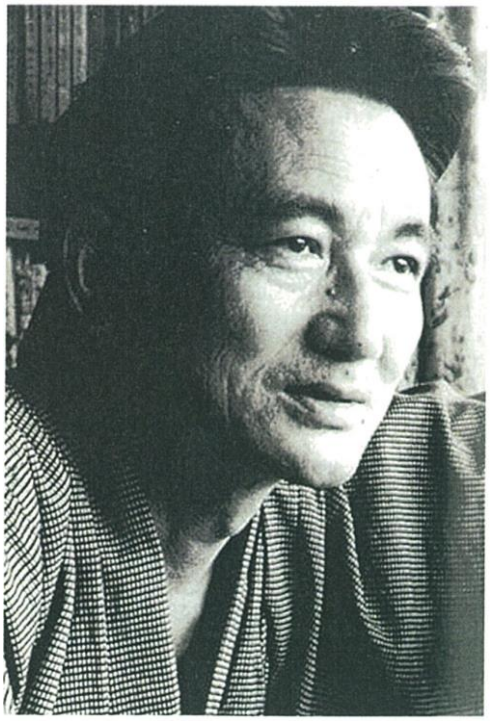
郷土の偉人

戦後文学の旗手　**小田　仁二郎**



南陽市生まれで作家と呼べるのは、今のところ小田仁二郎だけではないでしょうか。

仁二郎は明治 43 年、宮内町の医師の家に生まれました。小学校の頃はかなりわんぱくで、兄と一緒に池の跳びっこをして池に落ちたとか、宮内のお祭りで見世物小屋の辺りをうろうろしていて一日中家に寄りつかなかったとか、熊野大社の大いちょうに登ろうとしたとかなど、いろいろな逸話が残っています。

宮内小学校から長井中学校（現長井高校）に進学し、在学中に仲間と「花火」という同人誌を創刊。早稲田大学仏文科に進んでも「ヴァリエテ」を出したり、「早稲田文学」、「紀元」に多くの作品を発表したりしています。

昭和 10 年、大学を卒業すると都新聞（現東京新聞）に入社し、文化部文芸欄を担当しましたが、4 年後に退社し結婚。戦時中は一時海軍工廠（こうしょう）に勤め、戦後は創作に没頭、昭和 23 年、38 歳の時に「触手」を出版して注目されました。同 27 年「早稲田文学」に発表した「昆虫系」と、翌年「文学界」に発表した「メルヘンからかさ神」がともに芥川賞候補となり、同 29 年には「塔の澤」が直木賞候補となり脚光を浴びました。

同 31 年、同人雑誌「Z」を発刊し「写楽」などを発表しますが、この同人に瀬戸内晴美（寂聴（じゃくちょう））・吉村昭・津村節子などが入会し、仁二郎の指導を受けました。ことに寂聴は、仁二郎との歳月がなかったら自分の作家としての現在はなかったと述べています。

文･須崎寛二

平成 25 年 2 月 1 日号　市報なんよう掲載

宮内公民館前庭の記念碑